

Title	温州に見るプロテスタンティズムの諸相について：温州キリスト教会調査旅行報告
Sub Title	The situations of Chinese Protestant in Wenzhou : a report on Christian Church in Wenzou China
Author	関根, 謙(Sekine, Ken)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2009
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.2 (2009.) ,p.177- 192
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	調査報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20090331-0177

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

温州に見るプロテスタントイイズムの諸相について

——温州キリスト教会調査旅行報告——

関根 謙

1、はじめに

二〇〇六年度より今年度まで慶應義塾大学教養研究センター学術フロンティアのプロジェクトとして、「現代の危機——宗教と民族問題」という実験授業が行われてきた。これは大学教養課程における望ましいリベラルアーツの構築を目指すもので、それなりの成果をあげて、現段階での課題を最終することができた。本稿はこのプロジェクトの一環として行われた中国温州地区へのキリスト教会調査旅行の報告である。

温州は浙江の古い商都であり、貿易港であるが、中国プロテスタントの間では、早くから「中国のエルサレム」という愛称が定着していた。温州に最初の外国人宣教師ジョージ・ストット (G. Stott 中国名「曹雅直」) が到着し

たのは、一八六七年のことで、以来プロテスタントはこの地に一四〇年の歴史を刻んできた。^[1]プロテスタント伝道に先ずるのは、マテオリッチ (Matteo Ricci 中国名「利瑪竇」) に代表される明代のカトリック (天主教、イエズス会による) 伝道である。この段階における天主教の展開は中国の社会変革・科学技術に甚大な影響を与えた。しかし中国朝廷への細心の注意を周到に行ったイエズス会の宣教活動は、そのあまりに適応重視の姿勢によってローマ王庁から厳しい批判を浴び、紛糾の揚句に、清朝擁正帝によって全面的に禁止されてしまう (いわゆる「典礼問題」)。中国はカトリックと絶縁し、この時期のキリスト教宣教は終焉を迎える。それから百年、中国がプロテスタンティズムの流入を拒めなくなったとき、現在の温州に連なるキリスト教の展開が始まったのである。ヨーロッパ列強諸国の中国侵略、および太平洋天国の衝撃的展開が、その背景を形作っていった。こうした歴史の先端に温州があった。

2、キリスト教会をガイドするトロツキスト老人と自費出版文献

今回の調査旅行で特筆すべきことは、普通のルートでは見られないところをごく短時間に回りきったという点である。それは調査対象が中国ではセンシティブな宗教問題、それも急増するプロテスタント系キリスト教会であり、その陰には海外に知られたくない地下教会「家の教会」の存在が浮かんているからである。普通の「紹介状」一通で、速やかに事が運ぶとは思えないのだ。それを可能にしたのは、現地の人脈であった。実は私たちを案内してくれたのは、トロツキストの老人たちだったのだ。彼らはメンバーの一人長堀祐造の研究を通して知り合った貴重な人材で、長い政治的抑圧を耐え忍び、市民権を正当に回復して温州に暮らしていた。あとで確認してみると、彼ら

が案内してくれた教会はすべて温州キリスト教史上重要な拠点だった。また取材した教会サイドも、温州語で仲介する老人たちの誠実な態度によって、心を開き、熱心に答えてくれた。トロツキズムとプロテスタンティズムという一見絶対に相容れない対立を秘めた思想が、温州の特殊な文化風土のなかでごく自然に共存していたのだ。政治的権力構造から距離を置いた穏やかな関係が感じられたのは、まさに望外の幸運だった。

トロツキスト老人の卓越した見識は、今回の調査のためにあらかじめ収集してくれていた資料が、貴重なものだったことからよくわかる。そのうちの二冊はいずれも自費出版で書店経由では絶対に入手できないものであり、しかも一冊は出版直前の最終稿段階のコピーであった。温州という都市の不思議さは、こういう非公然出版物に対してかなり鷹揚だという点からもうかがえよう。調べてみると、この二冊の書物に対する書評はすでに正式に発表されていて、論者は温州新聞界を代表する著名なジャーナリストだった。その丁寧な書評には、正確を期すために草稿段階で温州大学の二名の教授によって校閲されたという断り書きまでしてあった。温州という枠組みは、中国全体を覆う常識とは異なる価値観を持っているのかもしれない。

二冊はいずれも翻訳書で、一冊はウイリアム・エドワード・スーシル (W. E. Soothill 中国名「蘇慧廉」) の中国伝道の回想録『拓荒布道』(原題『A Mission In China』) もう一冊はその妻ルーシー・スーシル (Lucy Soothill 中国名「蘇路熙」) の回想録『樂往中国』(原題『A Passport To China』) だった。それはキリスト教の伝道のためこの地温州に二十九年間もの長きにわたって暮らしてきた英国人の著書だったのである。迂闊なことにこのとき見落としていたのだが、スーシルはこの温州での宣教活動の後に帰国し、一九二〇年にオックスフォード大学中国学教授に就任していたのだ。オックスフォード大学の中国学研究は一八七六年にやはり宣教師だったジェームズ・レッグ (James Legge) を初代の教授として迎えたことにはじまるので、中国宣教と英国の中国学研究の密接

な関係が読み取られよう。翻訳書の紹介によると、夫妻によって温州のプロテスタント教会が確立されたばかりでなく、温州の西洋医学の発展から近代教育の普及まで幅広い分野で夫妻は大きな業績を残していたのである。中国語への翻訳者は両書とも呉慧という署名だった。現段階でまだ原書を確認していないのだが、『拓荒布道』の「策劃」者（プロデューサー）である包恩恩の後記によると、翻訳者は包氏の孫娘で、オックスフォード大学図書館の協力によって翻訳作業が進行したという⁵⁾。両書は温州にプロテスタント教会が最初の足跡を記した年から一四〇年目という記念すべき二〇〇七年に、一挙に出版（非公然の自費ではあるのだが）の運びとなり、これ以上の幸福はないと包氏は述べていた。コピー版の『楽往中国』には、原書の扉が掲載されていて、そこにははっきりと、BODLEIAN LIBRARY OXFORD というあの有名な円形の蔵書印が確認できた。蔵書印中央に記された日付は SEP30 1931、英国で原書初版が刊行された年であった。

翻訳に使用した原本に関しては、『拓荒布道』の「訳者説明」によると、温州図書館所蔵の英文原書となっている。先の書評の叙述と合わせて事情を読み取ってみると、この原書は北京の古本屋で一九六〇年に考古学者夏鼎が見つけたもので、買い求めて故郷の図書館に寄贈し、翻訳者の出現を待っていたということらしい。夏氏は社会学院考古研究所所長を務めたような著名な学者で、その後、温州図書館長にも就任している。古本屋での発見から翻訳完成まで半世紀近くの時間が流れ、温州はこの間、文革の嵐に耐えなければならなかった。「説明」には翻訳者の苦心惨澹の跡がとつとつと語られている。

3、取材調査の詳細

この調査は二〇〇七年十二月二十三日から二〇〇七年十二月二十八日まで、慶應義塾の中国研究者長堀祐造（経済学部）、渋谷誉一郎（文学部）、と筆者関根謙（文学部）によって進められた。温州現地での紹介者は黄公演、陳良初、陳鏡林の三氏、訪問した教会は取材順に、温州市内の永光堂教会、花園巷教堂、西城教堂、そして郊外の甌北地区永嘉県花畧教堂であった。

懇談の記録1（十二月二十四日午前、温州市内、陳良初氏宅）

今回の訪問が可能になったのは陳良初氏が温州市の人民代表大会委員（陳氏の旧友）の紹介を取り付けて、手配してもらった結果である。この温州三老人はトロツキストとして中国政府から長年にわたり市民権を奪われていた。彼らはみな青年時代からの友人で、現在市民権は復活したものの、思想的な復権はまだ獲得していないという。

彼らはキリスト教会が文革時代を通して地下活動を余儀なくされてきたことに深い同情をしめしていた。そして反対意見、反対政党的存在を許さぬ官僚体制に、鋭い批判が語られた。彼らの同志には著名な革命家鄭超麟⁴がいるが、鄭は獄中に二十七年間もの長きにわたって監禁された。三老人たち自身も労働改造という名の強制労働の日々を生き抜いてきたのだ。その卓越した精神力にはただ敬服するしかない。

懇談の記録2（十二月二十四日午後、温州市内松台、永光堂教会）

松台というのは温州市の閑静な公園地区にあり、教会のわりと大きな建物はクリスマスの飾り付けで非常に目を引いた。周囲には商店があり、上品な居住地区という印象を受けた。私たちに応対してくれたのは、堂務委員会委員（堂務委員会というのは日本のプロテスタント系教会の執事会に当たる組織）の一人だった。

突然の訪問だったが、この堂務委員は少しもあわてず、きちんとした受け答えをしてくれた。ただ、私たちのような訪問は公安関係を通すべきだということをかかなり強調しておられた。しかし人民代表大会委員の紹介と慶應義塾大学の「正式な紹介」、さらに温州在住の三老人の保証などに安心されたようで、私たちは教会内をゆっくり案内してもらえ、信徒の話を親しく伺うこともできた。ちょうどそのとき教会の信徒たちは夜のクリスマススイブの集会準備中だったので、私たちは夜の集会にも招待されたのだが、結局このあと歩き疲れて残念ながら参加できなかった。ここで話されたことは、第一に、温州のキリスト教徒は市民の約半数を占めていて、政府の安定と協調の政策の下、社会の中で期待される果たすべき役割を持っているということと、第二に現在の信徒数は地下の教会（家の教会）も含むとかなりの数であるという二点だった。取り立てて大きな発見はなかったが、ここで私たちは温州の教会組織について初歩的な感触を持つことができた。

懇談の記録3（十二月二十五日午前、温州市内花園巷、花園巷教堂）

この教会は温州のごった返した市場と下層の住宅地区の中に、路地に囲まれるようにして建っていた。中国南方都市の下町の臭い、生活の響きに満ち溢れているところだった。教会のある路地の曲がり角に奇妙な格好で這って歩く中年女性の姿があった。彼女は手足が湾曲して足腰が立たないようだった。物乞いのようにもあつたが誰の注意もひいてはいなかった。後で調べてみると、この教会の建っている場所こそ、温州に初めて伝道の足跡を記し

たジョージ・ストットが半生を送ったところだった。ジョージ・ストットの記録はキリスト教プロテスタント系の組織 OMF (Overseas Missionary Fellowship、当時の中国語団体名は「中国内地会」Chinese Inland Mission) のインターネットサイト上に尊敬の念をもって書きこまれている。ストットは英国人で、一八六七年にこの地に到着後、二十三年間、まさに一心不乱に宣教に努めた。ストットは青年時の事故により片足を失ったが、その後に篤い信仰をもつに至り、宣教の情熱に燃えて中国に渡ってきたのだった。彼を温州に送ったのは、プロテスタント中国宣教活動の先駆者の一人、ジェームズ・ハドソン・テラー (James Hudson Taylor、中国名「戴徳生」、先にあげた OMF の創始者) だった。片足の障害者を中国に送ることについては反対議論が相当あったようだが、ストットは「両足そろった人間が中国に行かないから私が行くのだ」と強く主張して、温州宣教が実現したと記録されている。このストットが初めて温州に現れたときの人々の驚愕は想像に余りある。「黄毛碧眼の片足の異人が人の肝を食う」と恐れられる中で、彼の宣教生活が始まったのだ。やがてストットはこの地で結婚し、新妻とともに温州キリスト教会の礎を築いていった。二人の宣教生活に関してはストット夫人グレース (Grace Cigge Stott) の回想録『Twenty-Six Years of Missionary In China』(1898) に詳述されていて、多くの資料がこの書からの引用を使っている。

花園巷教堂はまさに下町の教会そのもので、平屋を継ぎ足したような建物群が教会の敷地に広がり、それらの一番奥に、決して豪華ではないが清潔な感じのする大きな礼拝堂があった。あちこちで信徒たちがクリスマスの出し物と思われる歌や踊りの練習に精を出していた。この教会に対してはトロツキスト老人たちの事前紹介がすっかり利いていて、私たちが到着するとすぐに、堂務委員会メンバーをはじめとして主要な指導者たちが迎えてくれた。

お互いの紹介のあと、副主任の一人から花園巷教堂の歴史とおよその状況について詳細な説明があった。概要は

以下のとおり。

温州キリスト教の歴史は一八六七年に始まり、花園巷教堂は一八八七年に建設された。今年はちょうど一四〇周年記念となる。教会の正式な牧師は、高建国氏、八十八歳の高齢である。まだ後継者が育っていないが、現在若手の教師があとを継ぐことは確実となっている。プロテスタント系は牧師層が薄く、教会典礼なども各会派が勝手にやっていたりする状況がある。これは文革など政治的抑圧下で、自由な教会の伝道ができなかったからで、主イエスとの直接の関係、聖書のみによる信仰というプロテスタントの特徴も影響している。現在は、各教会とも牧師などの教育に熱心で、「神学校」も増えつつある。花園巷教堂の敷地建物は以前、解放軍部隊が占有していたが、計画的に返還され、現在五分の一程度が戻った。今後さらに千二百平米ほどの土地が増える予定で、市内最大の教会に成長するだろう。資金はすべて寄付金によっている。「義工」と呼ばれるボランティアが多数存在し、彼らを中心に教会活動が進んでいる。また聖楽団（賛美歌合唱隊）が熱心に会員を増やしている。

プロテスタント系は二つの会派に分かれる。三自（自立、自伝、自分たちのみで伝道する）、自養（自分たちの力と資金で活動する）愛国教会がひとつ、もう一会派は国家の規制に反対して地下活動中の「家の教会」である。花園巷は三自愛国派である。正確にいえば、「愛国」という名を冠して公然とキリスト教徒としての活動を展開中である。教会を監督する所轄の関係は、教堂（キリスト教会）↓公安（派出所）↓宗教局↓統一戦線部（統戦部）という上下関係となる。一九四九年の政府公式全国統計によると浙江省に七十万人の信徒、そのうち十万が温州在住だった。現在浙江省には二一五〇箇所の伝道所がある。中国政府は同じクリスチ

ヤンであるカトリックとプロテスタントを「神」の訳語が違うこと（「天主」と「基督」）などによって別な宗教としているが、私たちはお互いにクリスチャーンの信仰をもつものとして敬意を抱いている。

この副主任の説明の後、教会敷地内で別な指導者の一人の話も聞くことができた。以下この老キリスト教徒の話。

政府は教会堂以外での活動を一切認めていない。布教ももちろんだめである。ただ教会内なら、どんなに人を集めても文句は言われない。だから教会内ではみな自由な雰囲気、教会が人々の心の安らぎの場となつて活気にあふれている。また布教に関しては、表でやらなければいいだけの話であり、対象者を教会内に誘つてきては拡大している。企業ぐるみで入信する例も珍しくない。

また若手の指導者とも個人的に話す機会が持てた。彼の話から筆者には、「三自愛教会」と「家の教会」が決して対立しているわけではなく、お互いにむつまじく交流しており、海外のメディアの報道するような「敵対関係」は存在しないように感じられた。この指導者はキリスト者にとって、神を信じることのみが大切で、国境や民族などはその他の条件に過ぎないということを強調していた。また彼は、現在農村部でキリスト教の信徒が爆発的に増えている状況も紹介してくれた。

私たちはこの日、教会内での懇談や施設見学の後、教会側のご招待を受けて、下町の先にあるきれいなレストランで会食した。教会からは信徒を代表して数名の指導者の方が来てくれた。当方はトロツキスト三老人と私たち一行三人が全員出席した。はじめに若手の指導者が祈祷、その後楽しく親しい交わりの時間があった。CDやDVDをたくさんいただいたが、私たちはそのうちの数枚を公安から不用意な嫌疑がかけられぬようにお返しすることに

した。私たちは彼らの信仰の篤さを深く感じると同時に、統制社会での活動の繊細さを感じざるを得なかったのである。

懇談の記録4（十二月二十五日午後、温州市内城西地区、城西教堂）

このクリスマスの午後、私たちはトロツキスト老人の案内で、もう一箇所の見学に行った。そこは温州市内西部の繁華街で、買い物客などのすさまじい雑踏の中をずんずん進んだその先に、ゴシック様式の本格的な教会堂があった。人の群れのごった返す商店街に突如現れた西洋風の立派な教会に、私たちはいささか度肝を抜かれた。ここでも老人たちによる紹介がすでにきちんと行われていて、私たちは広い教会敷地内を案内されていた。この教会こそ、冒頭に述べた二冊の翻訳書の著者ウイリアム・エドワード・スーシルとスーシル夫人ルーシーとが宣教活動の拠点に据えた歴史ある教会だったのだ。教会は非常に大きな礼拝堂を持ち、ここでは多くの信徒たちが集まって、クリスマス演芸の夕べが開かれており、大変な賑わいだった。教会内にはちよつとした書店が常設されていて、私たちもここで数点の書物を購入した。

私たちは教会の二階部分にある教会事務室で長老張大鵬氏の話聞くことになった。以下はその概要である。

温州にキリスト教が伝わるのは一八六七年で、循道会（メソヂイスト派）の伝道だった。その後アメリカの会派（セブンスデイ・アドベントイスト）が一九一九年に宣教を開始した。中国耶穌教自立教会は一九〇六年に設立された。宗教と政治の衝突の歴史が長く、一九二四年温州に共産党支部が確立された後、一九二五年の「五三〇」運動のころには共産党にキリスト教牧師が加盟していた。現在は温州市内に八十万人の信徒（カト

リックは十一万人)。浙江省規模では、プロテスタント百五十万人、カトリック二十万人（いずれも地下教会は含まず）。全国では国家の統計でも三千万人の信徒（地下教会含まず）がいる。清末のころは三百万人がカトリックで七十万人ほどがプロテスタントだった。道教や仏教の数が圧倒的に多いが、イスラムも含めて、宗教界は穏やかに協調して活動している。

鄧小平時代は「信仰の自由もあれば不信仰の自由もある」、江沢民時代に「宗教は社会主義社会に適應して存在を続ける」、これらはいずれも受動的な立場だったが、現在の胡錦濤政権では、党綱領に「宗教の社会における積極的な働きを發展させ、大衆を団結させる」と明記するほど、宗教の積極的意義を認めるようになった。

黨員の中にも信徒が拡大中である。中国のどこに行っても、温州人が礼拝できるような場所が確保されている。経済商業都市、自立した都市であった温州の地域性も関係していよう。文化大革命中も含めて、これまで温州のキリスト教宗教生活が途切れたことはなかった。張長老自身も文革中の一九六八年に洗礼を受けており、そのとき地下の教会で一緒に洗礼を受けた人は二十人もいた。今後は社会の中での積極的な働きを強めて、「協調社会」の中で教会を發展させていく予定である。

教会は信徒に三つの生活（①家族、②国家、③教会）をきちんとするように指導している。また目標として「五つの合格」（①信徒であることに合格、②公民であることに合格、③職員であることに合格、④家族の一員であることに合格、⑤隣人であることに合格）を掲げている。かつては「キリスト者が一人増えると、中国人が一人減る」といわれて非難されたが、教会は愛国の運動の中にあり合法だ。

マルクスは「宗教はアヘン」と言ったが、それは宗教の治癒の力を指すものと理解している。実際教会信徒

は社会の安定のよりどころとなっており、犯罪者や反社会的行動をとるものは極端に少ない。教育は教会内の宗教活動に限られていて、義務教育には手を出せないことになっているが、社会の中で果たすべき役割として、今後もし許されるようであるなら、一般教育も考える余力はある。実際、浙江省には「養真学校」という教会の出資した義務教育の学校がある。ただ、倫理などで宗教を教えたり布教したりするのは厳禁となっている。

張長老は一時間以上も自信に満ちた表情と語り口で、歴史ある城西教堂と温州キリスト教会の現状を説明してくれた。共産党とキリスト教会の関係の複雑さは想像通りだが、ある種の「したたかさ」も強く感じられた。この日の私たちの収穫は実に大きく、楽しそうなクリスマスの歌声を後に、充実した気持ちで帰宿することができた。

懇談の記録5（二〇〇七年十二月二十六日、甌北地区永嘉甌江教堂（花罌教堂））

この日は花園巷教堂の指導者お二人の先導によって、温州郊外の教会に見学に行った。温州市郊外では市内よりさらに大規模なキリスト教会があると聞いて、このお二人に案内をお願いしたのである。私たちは彼らの運転する乗用車に乗り込み、温州東部を流れる甌江をフェリーで渡って、郊外の農村部に入って行った。私たちの向かったのは「花罌教堂」、十年前に建てられた九階建てという巨大な教会で、田舎道の劣悪な状況からは全く考えられないほどの威容を誇る荘厳な建物だった。前日のクリスマスには何と五千人もの人々が礼拝に参加し、教会では何回にも分けて礼拝が行われたという。私たちは教会の建物を詳しく見て回った。壮大な礼拝堂、音響設備の整った説教場、合唱隊の練習場、牧師や指導者たちの会議室、豪華な応接室など、これまで見てきた中国各地のあらゆる教会を確実に上回る内容だった。また、教会の高い塔に登って周りを眺めると、こういう教会がほかにも二か所確認

できた。この地域が「中国のエルサレム」と言われる理由が、今更ながら、よくわかった。

私たち一行は教会最上階の豪華な応接室で陳永聡牧師ほか多数の幹部との交歓座談会に臨んだ。座談会の最初と最後に、陳牧師が私たちのために祈禱を捧げた。以下は、その際の主に陳牧師の話である。

永嘉県九十二万の人口のうち六十五%がキリスト教の影響下にあり、信徒数は十一万人。正式な伝道所は二百九十九箇所あり、その他も合わせると八百箇所近くに伝道の拠点を持っている。ここには十か所の牧区と教派がある。陳牧師が政府から正式に公認されたのは二〇〇五年である。

一九五八年から二〇〇一年まで宗教活動は不正常な状態が続いたが、現在は正常な発展を続けている。ここでは共産党幹部はもとより、警察公安関係者に至るまで教会の信徒が広がっている。社会の中で果たすべき役割が広がり、また政府から期待される活動も展開できている。

教会学校など子どもたちへの教育問題に関しては、教会の触れる要件ではなく、今後もそういう計画は持っていない。

ここでは宗教活動が農村の人々の生活の中核にしっかりと据えられているのがよくわかった。教会のすぐ下には小学校があり、子供たちの遊ぶ姿が見えたが、陳牧師の言うとおりそれは教会主導の学校ではないとはいえ、関係する大人たちのほとんどがキリスト教の信仰をもっているということは、学校教育の実体的な中身に、中国のほかの地域とは相違があるとみていいのではないかと想像した。

4、現段階のまとめとして

本調査報告のまとめに代えて、数点の問題に触れておきたい。

第一は、聖書の中国語訳についてである。聖書の中国語訳は極めて長い歴史を持っているのだが、本格的な中国語訳としてはロバート・モリソン (Robert Morrison 中国名「馬礼遜」) がウイリアム・ミルン (William Milne 中国名「米憐」) の協力を得て一八二三年に刊行した『神天聖書』が挙げられる。⁵⁾ それ以後モリソン訳の改定版ともいべき『新遺詔書』『旧遺詔聖書』がウォルター・ヘンリー・メドハースト (Walter Henry Medhurst 中国名「麦都思」) とカール・フリードリッヒ・A・ギヤッツラフ (Karl Friedrich A Gutzlaff 中国名「郭实獵」) の協力によって一八三七年ごろに出版され、さらに二十年後には官話による聖書もメドハーストらを中心に刊行されるに至った。聖書翻訳史はこれらの血と汗の結晶ともいべき苦心の名著を中心に語られるのだが、管見する限りこれら正統的な流れの中で、温州プロテスタント伝道によって生まれた温州語訳聖書についてはあまり触れていないようだ。それを完成させたのが、スーシルだったのだ。スーシルは語学の天才であった。彼は啓蒙書や賛美歌を温州の発音を基準にしたピンイン表記によって翻訳する経験を積んでいた。彼の音感の鋭さによって、温州語が翻訳可能な言語体系として対象化されていったのである。彼は宣教の活動の傍ら、この大変な翻訳作業に従事したわけだが、その日々の苦闘には頭が下がるというほかはない。そうして長い歳月をかけ、聖書は温州語に翻訳された。スーシルは次のように述べている。

私の人生の中で、主の言葉を中国語に翻訳した数年の時間は最も充実したもので、靈感と啓発に満ちた年月だった。私は翻訳の成果がほかの人に多くの助けとなるだろうということはもちろんわかっているが、本当は翻訳者自身こそ最大の受益者であるのだということを得得した。⁽⁶⁾

なおスーシルには、このほか論語の訳（『The Analects of Confucius』）、仏教語の辞書（『A Dictionary of Chinese Buddhist Terms』）や中国歴史（『A History of China』）などの著作もある。

第二は、プロテスタント宣教についての中国の一般の見方である。「仏教は白い象に乗って中国にやってきたが、キリスト教宣教教師は大砲の弾に跨って中国に飛んできた」という表現がよく使われるが、こういう言い方にはアヘン戦争以後の列強諸国の中国侵略の先兵としての宣教教師像の固定化と、それに反抗する中国民衆の怒りの爆発としての宣教教師への暴力という図式化がうかがえよう。実際、ストット夫妻もスーシル夫妻もそういう暴力に遭遇した経験を持っており、そのときには信仰心の篤い中国人信徒に匿まわれていた。温州キリスト教会の公的文献の教会史などを見ても、こういう部分に対しては、宣教師派遣の背景となった列強の中国侵略に憤りを表し、その後の教会の歴史の中で、三自愛国運動を中心にした「中国的」キリスト教活動の自主性を公言している。しかしながら温州では、そういう公的立場と私的感性との間にある微妙な相違を感じ取ることができた。包思恩の刊行した二冊の翻訳書の存在自体が、温州キリスト教徒の気概を示している。彼らは温州にキリスト教会を根付かせてくれた外国人宣教師たちに、言葉では言い表せないほどの尊敬の念を抱いているのだ。

「中国と西洋の美が溶け合うとき、どんなことも実現可能になる」とは、ストット夫人の回想録を結ぶ言葉である。公的な歴史のコンテクストの周縁にこそ、人間の真実に迫るダイナミズムが秘められているのだ。

注

- (1) 『温州基督教』（浙江省基督教協会出版 二〇〇〇年五月）、および「基督教最初伝入温州片断」（高建国、温州文史資料第七、九輯）による。著者高建国氏は本文中で紹介した花園巷教堂の牧師である。
- (2) 「想起蘇慧廉」方韶毅による書評。文末に阿雅、瞿光輝両先生の校閲を経たと明記してある。方氏は『温州評判』などの著者。インターネット上で書評を確認。日付は二〇〇八年七月九日。http://blog66wz.com/user3/fangshaoyi/237717.html
- (3) 両書とも後記で支援協力への謝意が述べられているが、その中に、オックスフォード大学ボードリアン図書館東洋書籍部門のライブラリアンであるDavid Hellwell（本文中ではHellwellと誤植）氏の名が大きく挙げられている。
- (4) 鄭超麟については長堀祐造が多くの論著を残している。『初期中国共産党群像1 トロツキスト鄭超麟回憶録』（平凡社、二〇〇三年一月）など参照。
- (5) 『中国プロテスタント伝道史研究』（吉田寅著 汲古書院 一九九七年一月）参照。
- (6) 『拓荒布道』（蘇慧廉著、呉慧訳 自費出版 二〇〇七 温州）二五九―二六〇頁。
- (7) 「基督教在中国的命運」（習五一著 中国社会科学院院報 二〇〇八年四月）参照。
- (8) 『楽往中国』（蘇路熙著、呉慧訳 自費出版 二〇〇七 温州）三九六頁。